

も余の芋虫を見て、吸物は食はぬ事とした。いづら中仙道でも芋虫を御馳走には
出さなかつたに相違ない。

翌二十日午前五時起床七時三十分といふに旅宿を發して淺間山の登山を試みる
事とした。案内者二人を僦りて辨當と草鞋とを背負はせて「ゴロタ」ノ原と稱
る大いなる原野を横斷つた。この原に於いて目にまつた植物は、

- キスグ (方言)
- ムラサキハタザホ
- コウリンクワ
- シロバナノカハラマツバ (方言)
- スズサイコ
- シヤデクサウ
- イブキシヤカウサウ
- ノガリヤス
- ミノボロ
- コゴメグサ
- クサボケ (方言)
- マツムシサウ (方言)
- クサカンバ (方言)
- クララ (方言)

淺間山の下に一ツの瀧がある。これを血ノ池ノ瀧といふ。水の色褐色を帯びて
居る故に爾か名づけたものと見える。その傍に一ツの穴居に供すべき穴があつ
て高さは凡そ二三丈もあるかと思へた。その中に三人の男と一人の女とが入つ

せ居つた。布團を敷いて女は寝て居つたが、その他の人々は味噌を摺り米を炊
などの様が見えた。案内者の説明に據れば女は發狂者であつてその病を治する
が爲めにこの瀧に浴するのであるといふ事だ。この血ノ池ノ瀧に浴すれば發狂
を治するの効があるといふのである。

血ノ池ノ瀧の近傍に生えて居つた植物はマルバノクハガタサウ、コケモモ、キミカ
グサウ、マヒツルサウ、ハクサンラミナヘシキツリフチ等であつた。血ノ池ノ瀧の
溪澗にはキシヤブシが多く、イホタが花咲き、その間にズミといふ木、シモツケとい
ふ草ツルウメモドキといふ藤本、イハカガミといふ小草、シヤデクサウ、ナツノチャ
ヒキグサ、オキナグサ、レンゲツマヂ (方言) 等が生えて居つた。この邊には大さ
な蟻が居つて股の間に潜込んで煩さかつた。この蟻は殊に好んで味噌につくと

土人の話であつた
血ノ瀧より少しく登つた處に「オハツゴロ」ノ池といふがある。長さ七八間許、幅二
三間程に見受けた。その周圍にはスゲの類が多く生じて居つた。これに交つて
マユハキグサ、マツモシゴケ、ギンシヤウ、メダカラカウ、クガヒサウ、コメガヤ、オホ

ヤマフスマ、ノアザミ等があつて、殊の外美しかつた。追分の宿より此處までが一里程である。これより愈々淺間山に登りかゝる。その登口の植物は、クロマメノキ(方言)、コマラツクサ(方言)、ガンカウラン(方言)、コケモ(方言)、カシノコ(方言)、カンノウバイとは、村民がこの實を採つて、市に鬻ぐ時の名である。これ等は孰れも石南科の植物で、高山の外には産せざる種類である。その他ミヤマセンノウ、オウゴン、タデ、コメススキ、樹木にては、アカマツ、ヤシヤブシ(實とす)、フジマツ(方言)等で大抵植物は盡さるものである。我々の登山した登口は、後に聞けば最も困難な場所であつたといふ事だが、三尺登ればズルリと三尺下つてしまひ、一足の草鞋は一二丁で破れてしまひ、草鞋がなくなれば足を損してしまふ程登り難かつた。この山だけで、一人前六足の草鞋を破つてしまつた。大抵これにて、この登山の困難なる事は知るべしである。それでも一時四十分といふに、頂上なる無間ヶ谷といふ處に達した。それより二三丁程登つた處に石の祠が建つてある。これが淺間神社である。植物といふものは、此處に至つて殆ど皆無といふべきで、纔にコメススキといふ一種の禾本科植物を

いふ

いふ

見るのみである。そこで採集の仕様もないから、あとは所謂掘鉢穴を覗く位の事だ。その穴は宏大なるもので、周圍を廻つても餘程時間もかゝるが、危険くて穴の縁へも寄る事が出来ぬ。硫黄の氣は臭く、足下は何やら焼けるが如く感ずるのである。その日は夕刻に及んでもとの追分なる旅店に還つた。

翌二十一日は雨天であつたによつて、已むを得ず追分に逗留した。翌二十一日は晴天であつたゆゑ、午前八時に追分を發つて小諸田中、長瀬、長久保等を経て、午後六時に和田村に着いて一泊した。此處は追分を距る十三里半であるといふ。小諸はこの街道中、高崎以來の繁華なる土地で、舊牧遠江守の城下で、往時武田信玄がこの城に居つたといふ事だ。

翌二十三日は六時に和田を出發して、それより登降六里あるといふ和田時に、採集を試みた。その植物の概略は、

- | | | |
|-------------|--------|--------|
| キンバイサウ | イタチササゲ | ヲカトラノヲ |
| チダケサシ | ガンピ | ユウガギク |
| シロバナノカハラマツバ | ウツボグサ | アヤマ |

博物 信州淺間山と三ツの峠

セムガホ ヤマブダウ
 オムデシダ コオニユリ
 ホウワウシダ シヤデウサウ
 シクガイサウ フタバヤナギ
 ノコギリサウ ラミナヘシ
 フウロサウ オホゼリ
 アヅキナシ クサフデ
 ヤマドリシダ アツニ
 ミヤマワラビ シナノキ
 タニタデ ヤナギラン
 イブキトラノヲ

カラマツサウ
 カキラン
 カハラナデシユ
 ヤマハンノキ
 シロバナノギバウシ
 アマチヤ

ノコギリノキ
 カラハナサウ
 シシウドの種類三種程

等であるがこの表にも見える如く確氷峠などよりは遙に澤山なる事を感じて、キ
 シバイサウ、クガイサウ、ヤマドリシダ、アツニ、ヤナギラン、イブキトラノヲ等は深山
 的植物である。

この峠の中に西餅屋、東餅屋といふ所があるが西餅屋にかゝつた時分丁度十二時

であつた故こゝで午飯を喫へた。

和田峠を下つてしまつて下ノ諏訪に近づいた處の一つの山下に方たつて石碑が
 建つて柵を結び樹を栽ゑてあるのを見た。馬子の話に往時水戸の浪士が諏訪及
 び松本勢と戦つて戦死したその墓であるといふ事だ。この戦には諏訪勢も松本
 勢も陣太鼓や太砲を捨て、逃げてしまつた。浪士は勢に乗じて諏訪町に侵入し
 て其處に留まつたといふ話だ。我々は午後四時頃下ノ諏訪に着いて一泊した。

余は、淺間登山以來、少しも感冒の氣味で、十分の歩行も出来なかつたので、和田峠は
 馬に跨つて越えたのである。

翌二十四日は、田舎の事ゆゑ、葛根湯を服し、或は加密列などを求めて、感冒を治
 と試みたが、なかり治らなかつた。

翌二十五日は、午前七時に下ノ諏訪を出發して甲府へ向かつた。金澤、富士見村、高
 木、荻崎等廿二里といふ里程を、俥に乗つて、午後四時甲府に着いて一泊した。感冒
 も急に癒え、さうでもなく、病勢稍に暮る傾きがあるので、二十六日より三十一日ま
 であつた甲府に滞在して醫者の手當を受ける事にした。

甲府の言葉一三

甲府は、斯く々々しても、乙曰はく、オケアヘンヨ、これ等の言葉が耳について煩かつた。

八月一日、六時半に甲府を發つて東京への歸途にいた。病氣は治つても、未だ十分の恢復といふ程に至らなかつたので、籠子時にかゝつた時は、歩行に困難であつたから、籠籠に乗つて越えた。その時、籠籠の中にて見た植物は、

- ミヤマダフバナ
- タケニグサ
- キキヤウ
- タマアヂサ非
- シロバナノギバウシ
- フタバヤナギ
- パウシバナ
- アカソ
- ウツギ
- クサツラツ
- クサフデ
- ギンギシ
- ヤブジラミ
- クサフデ
- ウツボグサ
- ヤブジラミ
- クサフデ
- ギンギシ
- クサツラツ
- ウツギ

SK1

- カラハナサウ
- ホウワウシダ
- シデシヤジン
- イハデング
- クリ
- タニグハ
- デダケサシ
- ヌルデ
- シラカンバ
- ヲミナヘシ
- キツ子ガヤ
- ダイコンサウ
- タカトウダイ
- キンミヅヒキ
- ヲトギリサウ
- ヨモギ
- フデ
- ヤマブキ
- ダンカウバイ
- フキ
- イタドリ
- シラカハバウフウ
- クサボタン
- ノイバラ
- カハラナデシコ
- イヌゴマ
- ヨメナ
- ヒルガホ
- クルマバナ
- ナツノタムラサウ
- イシミカハ
- ホタルブクロ
- マツムシサウ
- ヲトコヘシ
- シラヤマギク
- ワラビ
- ウナギツカミ
- ボタンヅル
- ノガリヤス
- メドハギ
- コマツナギ
- コガチバナ

植物 信州淺間山と三ツの峠

SK1

この日は笹子驛で晝餐俵で野田尻に到つて一泊(甲府を距る十五里翌二日野田尻から八王子八王子から馬車に乗つて歸京した。

- | | | |
|---------|----------|----------|
| ガマズミ | ミヅソバ | ミツモトサウ |
| ウド | ムラサキツリフネ | ツリガ子ニンジン |
| レウリユリ | スモトリバナ | カセンサウ |
| カウゾリナ | シホデ | スズサイコ |
| ミツバウツギ | ナガドコロ | ハンゴンサウ |
| アキノノゲシ | クララ | ミヅタマサウ |
| ナハシロイチゴ | トモエサウ | キリンサウ |
| イタチササゲ | タウヒレン | ナベナ |
| ガンピ | ヤマハハコ | コゴメウツギ |
| ヲトコヨモギ | アマチャ | キツ子ノボタン |
| ミツバ | イハアカバナ | シモツケ |
| ミチシバ | | |

博 物 (植物)

理 學 博 士 松 村 任 三

信州戸隠山と越中立山

今より廿年前の事であつた。信州戸隠山と越中立山とに例の植物採集を試みたのである。夏の事で七月五日六時二十分上野發の汽車に乗つて上州高崎に着いた。高崎で午餐を喫べてそれより人力車に乗つて伊香保に向かつた。伊里柏木澤水滌等を経て午後五時半といふに伊香保に着いて木暮武太夫方に投宿した。この途上で見た所の植物は

- | | | |
|---------|---------|---------|
| マ、コナ | キケンシヨウマ | ウツギ |
| ギリンサウ | ギバウシ | ドクウツギ |
| カハラナデシコ | トキハカヘデ | コゴメウツギ |
| サンカグヅル | クマイチゴ | ナハシロイチゴ |
| ニガイチゴ | アワイチゴ | タカサゴサウ |

博物 信州戸隠山と越中立山

カウヅリナ
ムシヤリシゲウ
ミヅナラ
カハラマツバ
アキノタムラサウ
カデカヘデ
アヤメ
セ八

等であつた。
翌六日晴天。昨日来た道を人力車で高崎まで下つた。尙ほ進んで信州まで行く積もりであつたが、東京より發送した植物採集に必要な荷物が、何の行き違ひか、まだ着いて居なかつたので、止むを得ず高崎に泊らねばならぬ事となつた。
翌七日も晴天で、午前六時二十分に高崎を發つて馬車にて信州路に入つた。曩に淺間山に採集を試みた時の道とは違つて、碓氷峠を馬車が通ずるようになったので、この處には採集をしなかつた。その日は小諸に一泊した。
翌八日は午前六時に小諸を發つて、田中大屋、南條内川、上田等を経て、午后二時過ぎ善光寺に着いて泊る事となつた。この途上で目に觸つた植物は、千曲川の沿岸に、ナツメが多く野生して居るのを見た。イブキジャカウサウは、小諸、上田、南條邊の路傍に多く見受けた。川中島邊では、田の中にシチタウを多く作つて居るのを見

た。この行に於て、予が始めて見た植物は、チクマハクカとその後命名した唇形科シの一種であつた。これを腊葉にしては、花の色なども變はつて仕舞ふであらうと思つたから、略と花だけを記載しておいた。

Nepeta Cataracta (チクマハクカ) Flowers small. Calyx 15-nerved; corolla white, dotted with red, slightly hairy, 2-lipped; the upper lip rather short, emarginate, the lower 8-9-denticulate. Stamens 4; anthers reddish.

翌九日は長崎に滞在して中學校、博物館、醫學校等を參觀し、又その界隈の植物の採集に従事した。禾本科の一種で、近年に至つて、その専門の大家ハツケルといふ人が、これは世界に始めて知られた種類であるといふので、*Poa Matsunuriae*, Hackel. と命名した草は、この時の採集に係るものである。こは一種の雜草で、ヤマイチゴツナギに似て、枝状が籤細で軟弱な種類である。

翌十日は晴天であつたから、午前九時に長野を發つて戸隠に向かつた。長野より戸隠まで四里十町、奥の院まで五里といふ遠からぬ里程であるから、朝遅く發つても、昼にその日の中に戸隠に着いたのである。この間に、旭山といふのがあつた。

案内者のいふには、この山に大なる洞穴があつて、昔木曾義仲が住んで居たといふ話である。又この山には多く松茸が生えて諸方へ出すといふ事である。長野より戸隠に至る途上に、石童丸の舊跡であるといふ事で石碑の建つて居るのを見た。その奥に神社があつた。この前を過ぎてだん／＼行くと峠があつて、この峠を曲り曲つて登つた處に數軒の人家があつた。これを荒安村といふ。長野より一里許の處であつたが、その茶店に一休み憩んで、それより二里許進んだ處に又數軒の人家があつた。これを大久保村といふ。こゝにも一休み憩んで、長野より携へて來た辨當を喫べたのである。この邊には、シラタマノキ、オニゼンマイ、ユキノキ等のあるのを見た。大久保村より六十四丁許で戸隠村となつた。この戸隠村の正面に社があるが、これが戸隠明神といふのである。戸隠では神官の家に泊つたのであるが、この邊は、人の知る通り、信州蕎麥というて名高いのであるから、夜食は蕎麥で持ちさりであつた。その蕎麥の味は餘り好くもなかつたが、お世辭に賞めたところが、ドシ／＼薦められて閉口した。その夜は蕎麥を食ふ夢ばかり見た様な次第である。

長野より戸隠に至る間に目に觸れた植物は

- バイケイサウ(方言)ノテ イハナシ(方言)カン オニカサモチ(方言)ニシ
 - ナルコユリ(方言)メイ カラハナサウ(方言)カキドウシ 食ふといふ
 - クロヅル(方言)ゴソル レンゲツツジ(方言)ヨウキツツジ
 - ベニバナイチヤクサウ(方言)ズマ アヅキナシ(方言)ヨロシ
 - シロバナノシヤウジャウバカマ(方言)ズマ タニウツギ(方言)フリマナ
 - ハナヒリノキ(方言)ゴシは蛆の事だといふ ハナゴケ(方言)モエツクラ
 - ミヅバセラ(方言)カマレンといふ
- 方言フシツバ、一名ヤチイタヤといふものは、その葉を染料に供しシナノキは樹皮を採つて箋を造りカンボクは材を採つて揚枝を造るといふ。ノリノキは方言ニシ紙を漉く時の用に供すといふ。
- カウモリサウ(方言)イトナ ヤダケ(方言)ゲダケ ナツユキサウ
 - シモツケサウ ソウシカンバ ウバニシ
 - ミヅメザクラ オニアザミ

等であつた。

翌十一日は愈々戸隠山の裏山に登る目的を以て、人足數人を引き連れて宿を出立した。

黒姫山の麓に平原がある。それがいろ／＼の名があつて、越水の原中島の原、達磨石の原などいふ。これらの原を越えて、山に登る事となつたが、山は一面にクマザサが繁茂して居るので、これ押し分け掻き分け登つたのである。この笹藪を通り抜けた處で一ツの谷間に出た。そこには清水が流れて居たが、これを涉つたり、或はその流れに沿つたりしてだん／＼登る事となつた。この邊は、オホイタドリといつて、他所に見ぬところの、高さ七八尺もある葉はキリの葉の如く大なるイタドリの種類が繁茂して居たが、未だ花を開くところには至らなかつた。さうでもあらう、この谷間には、雪が所々に消え残つて居て、漸く雪の解けた處に植物が芽を出す位であるから、それでも、ニリンサウヤシラネアフヒ、サンカエフなどは花が咲いて居た。これ等の草と俱に、ランザニヤといふ草が生えて居て、當時予は、タキシタサウと命名したのであるが、既に實を結んで居た。どうかして、花の咲いて

るものを見つけたかと思つたが、遂に見つからず、纒かに花瓣一二片を存して居るものを得たばかりであつた。

流れに溯つて行く事一丁許にして極めて急流となり、忽ち瀑布となつて流れ落ちる處に遭つて登る事が出来なくなつた。止むを得ず左の方の崖に攀登つて、クマザサを押し分け掻き分け進んだ。纒かに足を容れるだけの道であるから、一歩踏外すと、斷岸數丈の下に落ちて身を粉碎されて仕舞ふのである。確とした木の根もないので、纒かに小さき草に縋つてこの難所を越えたところで、白雪が數坪の地を掩ふ處に出た。この雪を過ぎて少しばかりの平坦な處があつた。そこに潰れた小屋があつたので、一休み憩んだのである。

ふと見たところが、傍に蓑笠が脱いである。これは登山者があつて、此處に脱ぎ捨てたのであらうと案内者の話であつたが、後果たして四五人下山するのに逢つた。この邊で、クマガイサウと名を命けたのだが、クマガイサウに似て黄色を帯びた花の咲いてる蘭科植物の多く生えて居るのを見た。これよりだん／＼登れば登る程、奇岩怪石の出て来るのに逢つた。斷岸の上を渡る時、試みに岩石の小片を足

尖で轉がして見ると、ゴロ／＼と落ちて遙かの谷底まで達するのである。自分も過って脚を踏外せば彼の石塊の如く谷底まで轉がり落ちるだらうと思へば身の毛もよだつ様であつた。

斯様な場所には植物も多く生ぜず、唯だ僅かに、イブキ、ジャカウサウ、アヅマギク、コケモモ、ヨツバシホ、ガマサウ等の花咲けるのを見た。サラサドウダン、ヤウラタツツジ、ウラジロヤウラク、ツガ、タウヒ、マカンバ等の生えてる中にも、サラサドウダン、ウラジロヤウラクの花の、釣鐘の形をして、小さく優しく、その色の赤味を帯びたところは殊に美麗であつた。キスゲ、グンナイフウロ、オニカサモチ、ヤマツツジ等も花盛りで亦見事であつた。

この邊より或は下り、或は登り、艇の上を歩きながら、美しき花を探りながら、進む毎に奇岩怪石の顯はれ来るのであるから、その度毎に奇と稱し、妙と呼んで止まないものであつた。雲霧れる時は、昨日來た道、戸隠村の人家、四方の山々、皆數千丈の下に一瞬の中に見えて、さながら自分は別世界に在るが如く感じた。やがて又ヤダケの叢の中を押し分け、掻き分け行く事數丁許にして、少しく平なる處に出た。其處

に小屋があつた。堅牢なる木材を以て造られたもので、二間に三間の、戸無しの開放しの小屋である。それでも内に茶釜が一ツあつた。この小屋は東京なる守田寶丹の寄進であると、人足の話である。此處に我輩は凡ての荷物を卸させて休息したばかりでなく、今夜野宿の用意にとり掛つたのである。

人足は六人程あつたが、或者は藥罐を持つて澤に下り、飲用水を汲み來るもあり、或者は飯を炊くべき鍋、汁を煮べき鍋等を洗ふもあり、或者は木を伐つて薪の用意をするもあり、或者は棒を三本組み合はせて藥罐を吊り下げるもあり、或者は汁の實を採集するもあり、やがて料理も出來たところで、我輩は坐に着いたのである。板の間に人足の蘆を敷き、その上に里より持つて來た布團を敷いて、草鞋掛のまゝこれに坐つて夕飯を喫べた。汁の實にはヤダケの筍。フキの蘆、ギバウシ（方言）の葉、グイラクサ等を銚で削つてコト／＼煮たのだが、その美味い事は、善光寺の上等旅籠屋に於いて薦められた食物よりも幾倍美味かつたか知れない。だん／＼日も暮れて來たから、今度は寢仕度にかゝつた。というて、別に着て寢る物もないのである。人足はます／＼焚木を熾んにして、我輩の凍えぬ用心をする

のであつた。それで谷が出る程烟に巻かれて苦しかつた。その苦しい中で、或人足は我輩を興がらせようと思つて煙花を一ツ揚げて御覽に入れようといふ。何をするかと思つたら、ツガノキの枝を澤山伐つて来て、火の中に投じた。これを棒で動かすと、忽ちパチ／＼と音がして火花が揚がるのであつた。

その夜は其處に明かして、明くれば十二日、或は雨降り或は霽れ、天氣が定まらぬので、劍ヶ峯といふ山には登らずに、奥社岳といふ山にのみ登つて採集を試みたのであつた。戸隠山に於いて見た植物の概略は、

- | | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|-----------|
| カニカウモリ | シテヒゲサウ | ウリハダカヘデ |
| アサノハカヘデ | ツタモミヂ | ヤシヤビシヤク |
| イタドリ <small>(オホイタドリとは異なり)</small> | オシヤゴジデンダ | クマヤナギ |
| コシアブラ | ハリブキ | ハリギリ |
| タラノキ | トチノキニンジン | ワサビ |
| イラクサ | キンバイサウ | ミヤマゴイコンサウ |
| ハンゴンサウ | ヤマザクラ <small>(花はまだ開か)</small> | |

海拔四千八百尺の處で、風切岩と稱ふる場所に、ムシトリスミレの生えて居るのを見た。當時これをカザキリサウと名づけたのであつた。

その日は戸隠の旅宿に歸つて、翌十三日は雨天であつたけれども、戸隠を發つて午後一時過ぎ長野に着いた。次ぎの十四、十五の兩日は長野に滞在して、その附近の採集に従事し、十六日には後戻りをして、川中島邊に採集を試み、翌十七日の午前八時といふに長野を出立して、越後路に向かつた。

その日は、荒町、田子村、牟禮驛、柏原、野尻、關川、關山等を経て、新井宿といふ處に一泊して、翌十八日高田に着いた。高田の宿屋はなか／＼洒落れた宿屋であつて、當時關東なる東京附近などには見られぬ程であつた。といふのは、座敷の裝飾が、さも座敷らしく、又家庭的に、凡べて美はしき家財が備へられてあつたからである。これは上方風とでもいふべきであらうか、關東邊の宿屋には机もなく、茶器もなく、置物もなく、床の間もなく、至つて殺風景なものに比しては、迥かに上等といはねばならぬ。當時高田町の状態は町ばかり長く、極めて不潔であつたが、それは二十年前の昔の事で、今はさうでもなからう。町は皆人家の軒下を通行する事が出来る様

になつて居るから、雨天の時でも傘をさす必要がない。店の看板は黒く塗つて、の上に白く物を書く風のあつたのは、この越後路に入つて始めて見たところである。その時高田の宿屋の庭にあつた植物は、ヤツデ、シダレヤナギ、モミヂ、ビハ、シユロ、ヤブカウジ、トクサ、アラギリ、スギ、マツ、ナンテン、ウラジロ、カシ、アスナロ、マキ、シユラン、タケ等で、これを見ても、如何に庭園にも注意して居たかが分かる。その日は高田を發つて直江津に至り、午後九時午出帆の瓊浦丸に乗つて、翌日八時半は伏木の港に着いた。伏木より富山に行き、二十三日富山を發つて、立山に採集を試みる事にした。伏木、高岡邊では、ヤア〜と返辭をするのが耳に着いた。富山邊では半紙の事を八寸といふ。

富山より立山に登る途中に見た處の植物は左の如くである。

- スルデ(方言) ケンボナシ ミツデカヘデ キフデ クロモジ
- ダンカウバイ シルミ トチノキ サハシバ フサザクラ ウ
- リノキ イヌガヤ ムリノキ ミムラサキ ニガキ シナノキ
- フデ ミヅキ(方言) タラノキ ドクウツギ マタタビ

- ミヂ ヤマハンノキ ケヤキ オホイタドリ アカメガシハ
- ツバキ リヤウブ ルキエフボタン アカソ ツタウルシ
- シヤクシダ アキノキリンサウ アラキ ツバナ ハクウンボク
- ユヅリハ イヌツゲ ヤマウルシ クサアヂサキ キツチラン
- ウリハダカイデ(方言) ニハトコ アケビ ゴマギ(方言)
- キクパドコロ ボタンツル ツリバナ ツタモミヂ クマイチゴ
- ミヅシキ マサキカヅラ オホバコ ダイコンサウ フキ ギ
- ヤウジヤブキ トリアシシヨウマ ハナイカダ イカリサウ カ
- ニカウモリ ウマノミツバ ギバウシ クサギ イヌワラビ
- ツタ ヤブツテツ キノデ コガネワラビ トラノラシダ キ
- ンボウゲ ニガナ ミツナラ シユロサウ モミヂハグマ ヤ
- ブカウジ ベンマイ クマワラビ シシガシラ フトコヘシ
- ヤマソテツ ヒトツバカヘデ ミツバ ザツマウツギ パンシヨウ
- ヅル カハグルミ コナスビ ホガヘリガキ キイチゴ マツ

ノキハダツツジ メイゲツカイデ ハナヒリノキ ミツバツツジ
カシヲシミ アヲダゴ ソヨゴ ウラジロノキ アヲハダ(方言)
エゾガマツミ(方言) マンサク オホカメノキ(方言) ヨリ
ノキ(方言) イハナシ ナツツバキ(方言) ブナ コハウ
チハカヘデ ミヤマイタチシダ ヤマヅダウ ギヤウジヤノミヅ
ヤマドリシダ ヤグルマサウ ミヅイテフ イハカガミ キスゲ
クマザサ コゴメツツジ チンクルマ ミヤマシキミ ミヤマナ
ナカマド ワクノテ スギ ハヒマツ ヒメアスナロ アカモ
ノ ゴゼンタデバナ ツマトリサウ ミツバセヲ コシアブラ
トラノヲモミ マヒヅルサウ

この表を見れば、低きよりだん／＼高きに登った状態が分かる。ゴゼンタチバナやツマトリサウ、ミツバセヲなどは平地に生えるものではない。必ず高山に生えるものである。

その日は立山の山上なる室堂に泊った。が富山より此處に至るまでは道程も近

からぬので、勢に勢、その間に幾度か休んでなかく骨が折れた事であつたから途中の地名や景色などは目にも留まらず、今は全然記憶に存じて居ないのである。

富山を發つて、十一時半頃上瀧村といふ處に着いた事は覚えて居る。下瀧といふ處もあつた様だ。その下瀧より暫くの間常願寺川に沿うて歩いたり、又それを渡つたりした様であつた。渡つた處が即ち岩倉といふ處で、雄山神社といふ社があつて、伊邪那岐命、天手力男命の二神を祀る。即ち立山はこれを祀つたのであらう。その邊に神宮の家が四軒程あつた。昔は二十四の坊があつたといふ事だが、その四軒の中の一軒に小憩した事も覚えて居る。横江、千垣等を経て、午後五時頃葦泮寺村に着いて、其處に泊つた事も覚えて居るから、富山より立山まで實は二日費つたのである。されば富山より立山までは、九里以上の道程であつたかも知らぬが、今は皆忘れてしまつた。

この葦泮寺村を發つてより、藤橋、シヨウミヤウ川といふを経た。それにシヨウミヨウ瀧といふがあつて、それよりこの川は起つたのだといふ。川の水は藍の如

くで凄かッた。これより登り道になつて小金坂といふのがあり。材木坂といふもあつた。材木坂を登りつめた處に熊尾權現といふがあり、藤橋より一里、高さ二千四百尺であつた。それより上にピジョウ坂、カムロスギなどいふ地名もあつた。又その上をブナ坂といふ。ブナノキが多く、稍平坦なる場所があつて、其處をブナダヒラといふ。それより桑谷水があつて飲むべしである。桑谷を登れば沼地の原があつた。この邊には、ミツイテフやキスダが布くが如く生えて居た。それより彌陀ヶ原不動堂といふ處があつて、水有り清冽、また飲むべしである。この處は海拔五千尺である。

この邊に追分があつて、右は室堂へ登るべく、左は一ノ谷道といふので、それより碓氷原といふ場所があつて、植物が大いに繁茂して居た。これを登れば丈短きクマザサとハヒマツとが多く繁茂して居る。この邊で予は雷鳥を捕へむとして、捕へそこねて石に躓き、轉んで足を痛めた。

以上はおぼろげに記憶して居る立山登山の道筋である。山の上なる室堂には、我輩三人の同行者の外に、參詣者も多く居て、堂内はゴタ／＼して居たが、屋外は白雪

皚々寸地も雪の無い處はなかつた。これが七月二十三日の事であつたのだ。

明くれば二十四日、天晴れて一點の雲もなかつたから、これを幸に淨土山並びに立山の高峰に攀ち登つて採集を試みた。雪の上を渉る事何丁とも知れぬ程、雪深き事も亦幾尺。故に植物の採るべき者は無く、僅かに雪の消えかゝつた處に、キンバイサウ、ハクサンイチゲ等が咲いて居た始末である。この高峰を下つてより、下りに下りて彼の有名なる地獄谷まで下り詰めた。この地獄谷は植物の爲めには話すべき事はなく、涌き出づる泥湯が、ゴウ／＼と聲を立て、洞の中より沸騰して流れる有様は、ただ壯觀といふ形容詞を以てするより外、謂ふべき言葉を知らない。この日は立山神社の祭典と見えて、縣廳より——當時官名を何と謂うたか、今日の書記官に當たるべき官吏が、奉幣使としてこゝに出張したのである。我輩とは違つて、この人物は生まれて始めて山に登つたものと見えて、山に酔つて大病人だ。目は手拭を以て掩ひ、人の背中に負さつて前引後押大騒ぎで山を下るのを見たが、實に一大奇觀であつた。

二十五日、この立山を出てもと來た富山を経て、加州の金澤へと志した。白山の植

物は曾て採集した事があつたからこの度は唯だ金澤に設けられてあつた博物館を参観したのみで。その博物館には植物の標品が数多あつた。それは即ち腊葉帖で二十二冊もあつたがその中には文政五年五月採集など記されたものも見た。その中目についた標品は、

- イシモチサウ(石ノモチ)
- タヌキモ(タヌキ)
- キヌガササウ(キノガサ)
- スゲユリ(スゲ)
- ピロウドイチゴ(パイロウド)
- ミヤコミツ(ミヤコ)
- ホウロクイチゴ(ホウロク)
- ハマナス(ハマナス)
- サンセウバラ(サンセウ)
- マルバグミ(マルバ)
- ズミ(ズミ)
- ヨツバハギ(ヨツバ)
- ハマボツス(ハマ)
- イハナシ(イハナ)
- ヤマシバカヘデ(ヤマ)
- ヒトツバカヘデ(ヒト)
- コシアブラ(コシア)
- ウドカツラ(ウド)
- マバノホロシ(マバ)
- モトススキ(モト)
- サイトガヤ(サイ)
- コブナグサ(コブ)
- パレンシバ(パ)
- カモノハシ(カ)
- イハギク(イハ)
- チクマハクカ(チ)
- ユキノキ(ユ)
- カマツカ(カ)
- アキシバ(ア)
- ハナヒリ
- ヲトコヨウヅメ(ヲ)
- サハイシマ(サ)
- ドクウツギ(ド)
- ノキ(ノ)
- アキ(ア)
- ヲトコ(ヲ)
- サハイ(サ)
- ドク(ド)
- ノキ(ノ)
- アキ(ア)
- ヲトコ(ヲ)
- サハイ(サ)
- ドク(ド)

二九

等記名してあつた事である。その他これ等の植物の産地を記したものには能州荒山加州今江村越中乙女山(乙女山)礪波那谷村射水郡西田山加州醫王山寶達山等。その他日光や紀州や所々より採集したものを見て、一々その産地方言等を記してあつたがなか／＼得難き標品と見受けた。さて金澤より越前の坂井港に到り、それより敦賀に渡り、敦賀より長濱に到り、長濱より大垣、桑名等を経て四日市より海上東京に歸つた。

即物 信州戸隠山と越中立山

九五

御注文の節は本誌廣告に據る御附記を乞ふ

中等教育

君影草 (科合百)

朝日かげ句へる山に爛漫と咲きいでたる櫻菫もいつしか散り果て、輕風徐るに楡の梢を訪づる。六月の始となれば、解の木蔭、小川の岸邊などに鈴を連ねたる。其の美しき得も言はれず、谷間をいでし可憐の小鳥は、其の芳香に誘はれて、樂しき宿を花の間を求め、妙なる調を奏するなり。是れぞ歐米にて歸來を告ぐる此の花とを讚美するなり。野の花にて、和名は鈴蘭の姫百合と稱へ、愛でにめらる。漢字は米蘭にあてぬ。または君影草、俗の名は馬耳蘭と稱へ、漢字は米蘭にあてぬ。此の花は廣く歐米諸國に栽培愛養せらる。我國にては本州の淺間の原に生じ、蝦夷が島根には至る所に咲き句ひ、遠く千島のはてまでも乾ける原を飾る也。聞くならく函箱の遺愛女學校にては、百合探とて初夏の一日を遊び興する行樂を此の花の盛りに催すとぞ。あはれやさしき人々の心かな。

(川上瀧彌、森廣兩氏著「花」の一節)

袖珍本日新地圖
 袖珍世界新地圖

國外、本日
 判裁半六四各
 刊—○—新
 錢三拾四各價定
 錢四各稅郵

最も新らしき地圖を縮め、最も新らしき事實を記し、手軽く容易に閱覽し得るの便利は本書の特色である。附録には地誌の説明

もあり、最近の統計も記してある。携帶用旅行用などには此上なき重寶の地圖である

發兌元

東京神田裏神保町

富山房 賣捌 各地書店

全部五十冊
通俗文學界
 定價各廿錢

- 正宗白鳥君編
- 第七編 **マールリナ物語**
- 第一編 失樂園物語 第四編 水滸傳物語上
 - 第二編 マクベス外二 第五編 水滸傳物語下
 - 第三編 イリアッド物語 第六編 ハムレット外一

(刊新) **文學士長谷川福平先生著**
古代小説史
 (賣捌各書店)

全一冊洋裝總クロース製頗美本 定價六拾錢郵稅八錢
 本書は平安朝より室町時代の終に至る全小説を次第として分類し、且つ其の妙處を挙ぐ、及び文學に志ある人は珍書なり。小説を讀む人も一讀せざる可からざる

御注の文は節に據る旨附記を乞ふ

メエリーエムウキルン女史合著
大町 松波 女史合著

洋食のおけいさ

全一冊 ● 総紙數百五十八頁 ● 繪十五
石版刷表紙頗美本 ● 價廿四錢 ● 郵稅四錢
毎日喰ふものを餘分な費をせないので甘く搾らえるの
が料理をなさる方のお骨折です西洋料理の法も一家の
婦人方わドウシテモ心得て居なくてはなりません此
書わ餘計な費えをかけないで毎日の惣菜にもなる様に
よく解り安く總振かたつて又繪も澤山に入れてあり
ますし其に食方や御客に出し方等も書て有升から小供
にもヨーク解り升西洋料理と申しても種か牛肉や豚肉
にかざりた譯でもなし道具が可成有合で間に合せる様
にしてありするからどんな田舎に居てもわけなく出來
ます何わ兎に角此様にやさしい書わこれが初めてい外
にわありません甘いものを安く搾らえて内の方を喜ば
せるのわ何よりの御樂みだらうと思ひます

發 東京神田區小川町
元 大坂南區鹽町通三丁目
東京神田區表神保町東京堂 ● 同錦町勉強堂 ● 同小川町文會堂

富 寶 永
修 山 永
文 山 永
館 房 館

御注の文は節に據る旨附記を乞ふ

大日本地誌

大日本地誌 は全く在來の地誌と其目的方針を異にし、人文の關係を説くや極めて詳密極めて明
徹なり其體式は一に歐洲最新の地理書を參照し美麗なる精密地圖を挿入し本邦大地理
の各地方に於ける山系水系海澤港灣の形勢及び氣象の梗概を詳述し又各地の史蹟を
地理的に描寫して古今盛衰興亡の沿革を知らしめ其他行政司法の區別關係及海陸軍事
の狀態を詳載せり
大日本地誌 は産業部に於て農業工業商業礦業林業水産の六部に分類して各地の特産を記述し更に
鐵道船舶電信電話郵便道路等の交通機關は素より各地の名勝古蹟神社佛閣の調査は最
新の材料に依りて其敘述の明快なる其製本の堅美なる其印刷の鮮明なる等も間然す
る所なし殊に每冊著名都市の彩色地圖と名勝各地の寫眞銅版は斯等の手に成り精巧紙
上に光彩を放つ

理學士山崎直方君 共編
理學士佐藤傳藏君

齋藤文學士七種
文學士田山錄彌君 補輯
伊藤良造君

全 部 拾 卷
第壹卷 關東
第貳卷 關西
第參卷 中近
第肆卷 北近
第五卷 北近

東 部 羽 畿 陸
第六卷 中國
第七卷 中國
第八卷 九州
第九卷 北海道
第十卷 臺灣琉球

菊版總紙數約七千頁
第壹卷 新刊發賣 貳卷以下 續刊價格不同
裝幀美觀堅牢無比
背皮付金模
樣金字入
相模、武藏、安房、上野、下野、常陸、伊豆、七島、野、小笠原島

第壹卷 關東

發 元 博 文 館 目 丁 三 町 本 京 東

自立 東京古學案內

都新聞社員吉川笠城著 ● 合本全一冊金廿八錢送料四錢郵券代用一割増

附官立諸學校入學試驗問題集合本 ● 本書學資無き學生の
私立官立諸學校入學案內 ● 本書は、學資無き學生の
職業を求め勉學する方法を詳述せり東京に苦學の志し有る青
都新聞社員吉川笠城著 ● 全一冊送料共二十六錢郵券代用一割増

成功 官費入學案內

附官立學試驗問題 ● 本書官費貸費校の諸學
校入學試驗合本 ● 本書は、學資無き學生の
學の方法、入學志望者の資格、學力の程度、試驗の問
題、手續は勿論學校の性質卒業後の方針に至る迄細大
詳らかに説明 成功して立志の指南車 年諸氏
は本書を一 入學成功の秘訣 を知
讀して其の

發行所 保成堂

賣捌所 神田東京堂 ● 同上田屋
● 大倉書店 ● 大阪市博勞町四九善書店

訂正 聖諭略解

全壹冊 定價四錢 郵稅二冊迄

本會は明治二十七八年の戦役の時時勢の必要に應じ明治二十二年十月三十日下し賜ひたる教育に關する勅語と明治十五年一月四日我が帝國軍人に下し賜ひたる勅諭とを説明したる小冊子を編纂し題して「聖諭略解」と稱し以て一般の國民に普く 聖旨の貫徹せんを謀りしが爾來年を経ること九年時勢も漸く變遷して復た二十七八年の當時に同じからざるを以て更に訂正すべき必要を感じたると共に明治三十二年六月三十日下し賜ひたる改正條約に關する 詔勅をも説明して之を増補し其の書名を本題の如く改正せり
此の書は以上記述せるが如く教育上最も大切なる 聖諭を説明せるものなれば國民教育に従事せらるゝ大方諸氏の成るべく之を學校の生徒及び一般の國民に熟讀せしむるより盡力せられんことを望む

發行所 東京市神田區 一ッ橋通町 **帝國教育會**
發賣所 東京市神田區 小川町 **開發社**

歴史畫廣告

日本武尊

定價四錢 郵稅二冊迄 一本會々員及講習生割引

紫式部

定價四錢 郵稅二冊迄 全全上上

楠正成

定價四錢 郵稅二冊迄 全全上上

田村將軍

定價四錢 郵稅二冊迄 全全上上

和氣清麿

定價四錢 郵稅二冊迄 全全上上

菅公

定價四錢 郵稅二冊迄 全全上上

右畫像は文學博士墨川眞賴、文學博士小杉温郎兩君の考定に係るものにして出處考證の精確なるは勿論繪畫亦當世巨匠の筆に成るを以て歴史畫として教育上有益なるのみならず亦褒賞畫に用ゐるを得べく且つ室内製飾用として更に妙なり
發行所 東京市神田區 一ッ橋通町 **帝國教育會**
發賣所 東京市神田區 二丁目十三番地 **松聲堂**

新刊廣告

文學博士 坪井九馬三著

(挿圖數葉入)

早稻田史學研究法

全壹冊脊皮上製 紙數五百五拾餘頁 正價金壹圓六拾錢 郵稅金拾四錢

坪井博士史學を專攻せらるること多年一日の如く現下我國に於ける斯學の重鎮として令名噴々たるは普く人の知る處なり本書は博士豫て吾校史學研究者のたの講述せられたるを更に慎密に訂正を加へられたるに所説斬新且正確文章流麗且精緻固より坊間同類書の中に匹儔を見ざるのみ當來た容易に世に出でざる名著なり其内容の如き茲に贅を須す志を史學の研鑽に傾くる争て一本を座右に供ふべきなり

發行所

東京 牛込 早稻田大學出版部

發賣所 東京 日本橋區 博文館

文典の集

全一冊寸珍横長形
定価金十七錢
郵税金二錢

本書は見出し示し、如く普通の日本文典に遺漏せる
點を拾集せしむるに於て表には有る動詞詞に於ては
連続し一覽には普通用ゐる動詞形容詞を網羅せり
故に常に携帯して讀書作文の際巧に之を使用せば日
本文典は勞せずして知悉せらるべし、本小く製本堅
牢なれば實に携帯用に至便なり

發行所
東京神田小川町 寶永館
東京神田神保町 富山房
大坂南區鹽町通三丁目 修文館

文典の集

- あ 動詞一覽 夫中片假名活用の行 數字は活用の段を示す
- あかす(明)サ四他 あたす(定)サ變他
- あがむ(榮)マ下二他 あたゝまる(暖)マ下二他
- あがる(明)ラ四自 あたふ(遊)マ下二他
- あがる(上)ラ四自 あたふ(興)マ下二他
- あきふ(心)ハ四他 あたる(當)中、方、ラ四自
- あく(明)カ四自 あくは(心)ハ四他

刻下必讀之良書

露西亞帝國

全壹冊 春皮上製美本
紙數 八百五拾頁
正價 金貳圓
小包料 拾五錢

今や極東人士の耳目を聳動する者は露西亞なり然れども露西亞の本質實體は未だ世の知悉する所とならずして我邦人の多くは露西亞の名を聞き只だ暗中摸索的に其版圖の龐大と土馬の衆多とを想像し揣摩するのみ刻下動もすれば日露の關係迫らんとするの際此の如くにして已むべきに非ず露西亞史及び露西亞帝國は乃ち此欠を補ふを目的として出でたるもの前者は筆を露西亞の建國に起し上下二千年間に於ける治亂盛衰の跡を詳叙し殊に彼得大帝以下歴代君主の國是とす所のものを闡明し後者は露西亞人一般の政治上宗教上外於ける殊性殊質を述べ爬羅剔抉細大遺す所なれば苟も此兩書を綴れば階前千里外萬里露西亞の真相は坐ながらにして之を掌に指すべきものあらん極東風雲の黯澹たる今日此兩書の如きは經世家と學徒とを問はず必ずや一讀せざるべからず

露西亞史

全壹冊 總洋布美本
紙數 四百餘頁
正價 圓貳拾五錢
郵税金 拾貳錢

法學博士 高田早苗校閱 山本利喜雄著

發行所 東京 早稻田大學出版部
東京 日本橋區本町 博文館
東京 元賣所 發行

新刊報告

文學士 坂本健一著 (鮮明地圖插入)

叢書 伊太利亞史

全壹冊 總クローヌ頗美本 紙數四百五十頁 正價金壹圓廿五錢 郵税金拾四錢

伊太利亞王國は其建國の新たなる點に於て、其國土開闢の淵源遠くして幾多著名の史蹟を有するの點に於て、統一の大業急に成て而かも文物制度の發達頗る見るべきものあるの點に於て、其の國情頗る我日本に似たる所あり隨て其國民の特質其長短所の岐るゝ所必ずや彼我相似たるものなくんばあらず左れば吾人が伊太利亞史を讀むに由て生ずる幾多の感興は自ら他の列國史を讀むと異なるものあるや必せり而して坊間未だ此國の史を詳にしたるものあるを見ずこれ本書の出る所以なり本書筆を遠く四世紀の往古に起し最近三十年間の狀況を詳叙して摺む且つ其及ぶ所甚だ廣汎、歐洲文明興廢の事蹟亦本書之を示して詳なり

發行所 東京日本橋區早稻田大學出版部 發售所 東京日本橋區早稻田大學出版部

新刊報告

文學士 白石眞著

叢書 歷史 獨逸史

全壹冊 鮮明地圖 三葉插入

總クローヌ頗美本 紙數五百五十頁

正價金壹圓廿五錢 郵税金拾四錢

獨逸は素に歐洲古國の一、然も一旦瓦解に近きて復た活の運に向ひ半世紀の活動は遂に歐陸の中原に覇業を成就せし世界林立の國家孰か國史を讀む痛快、思ふ壯烈なる獨逸史の如き未だ曾て我國最近の文物制度獨逸に則り多てし而彼國の史に就て其由來を研究する者極て稀なり蓋し恰當なる史的著作の欠乏に因りて本書の出る偶然に非ざらん

發行所 東京日本橋區早稻田大學出版部 發售所 東京日本橋區早稻田大學出版部

早 稻 田 叢 書

法學博士 穗積 重 富 井 政 章 梅 謙 二 郎 序
 法學博士 岡田 朝 太郎 校 閱
 獨逸 法學士 孫 勝 子 (伯林大學教授) フ、ン、ス ト 著
 法學士 吾 勝 子 譯 法學士 乾 政 彦 共 譯

獨逸刑法論

全一冊 總洋布製美本 紙數六頁 餘百六拾金 郵稅六錢
 正價金壹圓卅錢 郵稅金拾六錢

刑法改正は現下法律界の一大問題なり此
 時に際し最新學說の精華を捉へ學界を裨
 益せむことを望みて本書を上梓せり原著
 者リスト氏は獨逸伯林大學の教授にして
 學問深奧識見卓拔彼國に於ける斯學の重
 鎮たるのみならず宏く世界に於ける法學
 界の泰斗たり殊に刑法は氏が多年專攻し
 たる科目にして該博適確其の造詣する處
 殆んど端腕すべからず而も氏が一代の名
 著は今や乾、吾孫子兩學士が苦心の譯に
 成り加之岡田博士の嚴密なる校閱を経た
 り學界の新潮に後れざらむと欲する學者
 實務家速に一本を座右に備へんことを望む

發行所 東京 牛込 早稻田大學出版部
 發賣所 東京 日本橋區 博文館

島村瀧太郎著述

新美辭學

全 壹 冊
 正價金壹圓卅錢
 郵稅金拾六錢

再 版
 發 賣

本書は全然著者の新見に成れる者文章論より美學に
 歸結し以て大方の批判を得んとす且初學者の爲には、
 文學の入門たるべき準備と研究の過程とを有せり文
 字に志あると否とを問はず國民の座右缺くべからざ
 るの良書なり

序 沈思精研の餘に成れる抱月君が新美辭學一篇は我が
 國に於ては空前の好修辭論たり彼方の類書に比する
 も周到なる修辭法に兼ぬるに創新なる美辭哲學を以
 てしたる證例の東西雅俗にわたりて富贍なるその例
 と多し斯學に志すの士は此の書にすがりて益する所い
 と多かるべし

背皮上製
 五百餘頁

發行所 東京 東本 橋區 早稻田大學出版部
 發賣所 東京 日本橋區 博文館

田中穂積著

最新高等租稅原論

全壹册
脊皮上製頗美本
紙數四百五十頁
正價金壹圓貳拾錢
郵稅 金拾四錢

本書の著者曩に『財政學』一篇を著して讀書社會の賞賛を博したりしが爾來六たび星霜を経て斯學に造詣する益々深く現下海外に留り歐米碩學に就きて推究研鑽怠らず其結果遂に本書を成せり本書題して高等租稅原論と云ふ必ずしも初學者の閱讀に適せざるか故に非ず其論究する處よく微細に入り普通原論に一步を進めたるものあればなり加之解義簡明にして行文平易先覺後進共に本書に須つ處尠からざるへし

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

新刊報告

米國エ、ローレンス、ローエル 著
法學士 柴原龜二譯述

最新政府及政黨

全壹册
脊皮上製美本
紙數七百餘頁
正價金壹圓五拾錢
郵稅 金拾六錢

我邦憲政を敷てより茲に十餘年上下漸く之か運用に慣るゝ者ありと雖も猶ほ泰西先進國に比れば其の及ばざること遠し所謂憲政有終の美を濟さむとする者は須く其機關の組織運轉に就て更に深く研究する所なかるへからず本書は歐洲大陸に於ける政府及政黨の組織運用を詳説し政黨の政府に對する態度政府の政黨を御する方略等之を佛、獨、奧、匈、伊、瑞其他の各國に涉りて一々事實に基き沿革に徴し讀者をして歴々睹るの想あらしむる所趣味津津々として掬す可く兼ねて歐洲現時に於ける政府政黨に關する法理並に其の成立を知悉するを得む若し夫れ一部最近政治史として視るも細叙精說罕に見る所ならむ思ふに憲政運用に對する絶好の教科書として本書を推すも蓋し溢美にあらざるへし

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町 博文館

新刊報告

新刊報告

法律叢書最新刑法論

ブルクセル大學教授アドルフ・ブリンス原著
 刑部帝國大學教授勝本勘三郎共譯
 東京法政學院教授淺見倫太郎共譯

全壹册總洋布製
 紙數約六百頁
 正價金壹圓八拾錢
 郵稅金拾六錢

法律は衣服の人體に於けるが如く人類生活の狀態に適合せざるべからず
 理論の高宗は事實と融和するに因て始めて光輝あり本書の原著者は歐米
 の刑法學者中屈指の大家として聲名宇内に轟ける人本書は則ち其最近
 の著述に係り近代諸國の刑法典と最近科學の產物として刑罰權の基礎
 を一新したる刑法の原理との融合を試みたるものにして所論適確理義明
 晰現下我國に於ける刑法改正問題に關し好指南たるべきや疑を容れず
 而して之が翻譯は則ち本邦斯學の重鎮たる勝本氏及夙に法曹界に令名あ
 る淺見氏の手に成れりと云へば其實質の如何は多く語るを要せざるべし
 學者幸に本書の先觀を以て人後に落つる勿れ

發行所

東京牛込
 早稻田大學出版部

東京日本橋區
 本町三丁目
 早稻田大學出版部

佛國文豪一馬作
 長田秋濤譯
 (訂正三版)

近世文學界の大傑作!

全一册洋裝頗美本三色版寫真版數葉入

小説椿姫

正價金八拾五錢郵稅十二錢
 特製金壹圓郵稅金十四錢

現時法曹界の一問題!

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
 東京市本區橋本丁三丁目
 早稻田大學出版部

著郎次又山横士博學理

頁餘百三數紙本美類製布洋總

版再 (匠意新本製)

行發

地誌論

本書の目的とするところは、歴史地理學專攻者の参考用に供するにあり。されど記事極めて平易なれば初學者と雖も難解の不便あることなし。天文の學未だ我が邦に遍からず其の大要を知るもの今僅に數名の學者に止るのみ。故に本書は歴史地理研究者に對しては勿論其の他に有用なる方面の學科志望者に向て偉大の利益を與ふべしと疑ふべし。

本書の体裁は普通の教科書類と異なり、通讀の際極めて理會し易いものならず又自然一種の興味を覺へて不識不知の間に科學の要領を會得するの任相然り世人は既に著者は斯道に於て多年經驗の士なるを知られた本書の價值又推して知るべし也。地文に志す天下の士一讀の榮を賜へ

發行所 東京市本町三丁目橋本區早稻田大學出版部
發賣所 東京市本町三丁目橋本區早稻田大學出版部

著郎次又山横士博學理

頁餘百三數紙本美類製布洋總

版再 (匠意新本製)

行發

天文誌論

本書の目的とするところは、歴史地理學專攻者の参考用に供するにあり。されど記事極めて平易なれば初學者と雖も難解の不便あることなし。天文の學未だ我が邦に遍からず其の大要を知るもの今僅に數名の學者に止るのみ。故に本書は歴史地理研究者に對しては勿論其の他に有用なる方面の學科志望者に向て偉大の利益を與ふべしと疑ふべし。

發行所 東京市本町三丁目橋本區早稻田大學出版部
發賣所 東京市本町三丁目橋本區早稻田大學出版部

新刊廣告

フクロワイルド 渡邊龍聖 田中達共譯

早稲田倫理學綱要
小篇

全 壹 冊
紙數二百餘頁
正價金四拾錢
郵税金六錢

本書の特色は種々の倫理學說を捕へ最も公平に最も平易に叙述説明の原著者セズ氏は現にエヂンバラ大學教授倫理學の講座を擔任し歐米の學界に斯學の重鎮を以て目せらるる人本校夙に本書を世に紹介の益ある思はれ抄譯を渡邊田中二君に囑し譯成茲に爾江湖に頒る大方篤學之士就中初學者必一本座右に供參考に資せらる

發行所 東京市本區橋本 早稲田大學出版部
發行所 東京市本區橋本 早稲田大學出版部

再版廣告

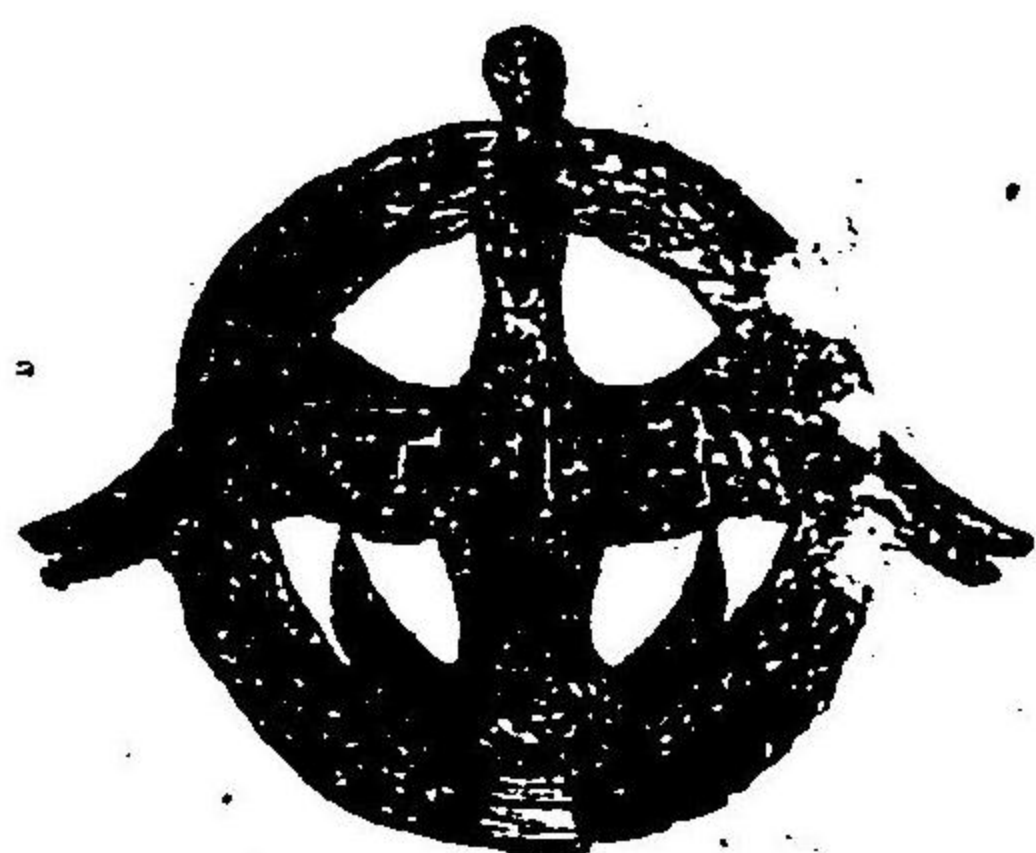
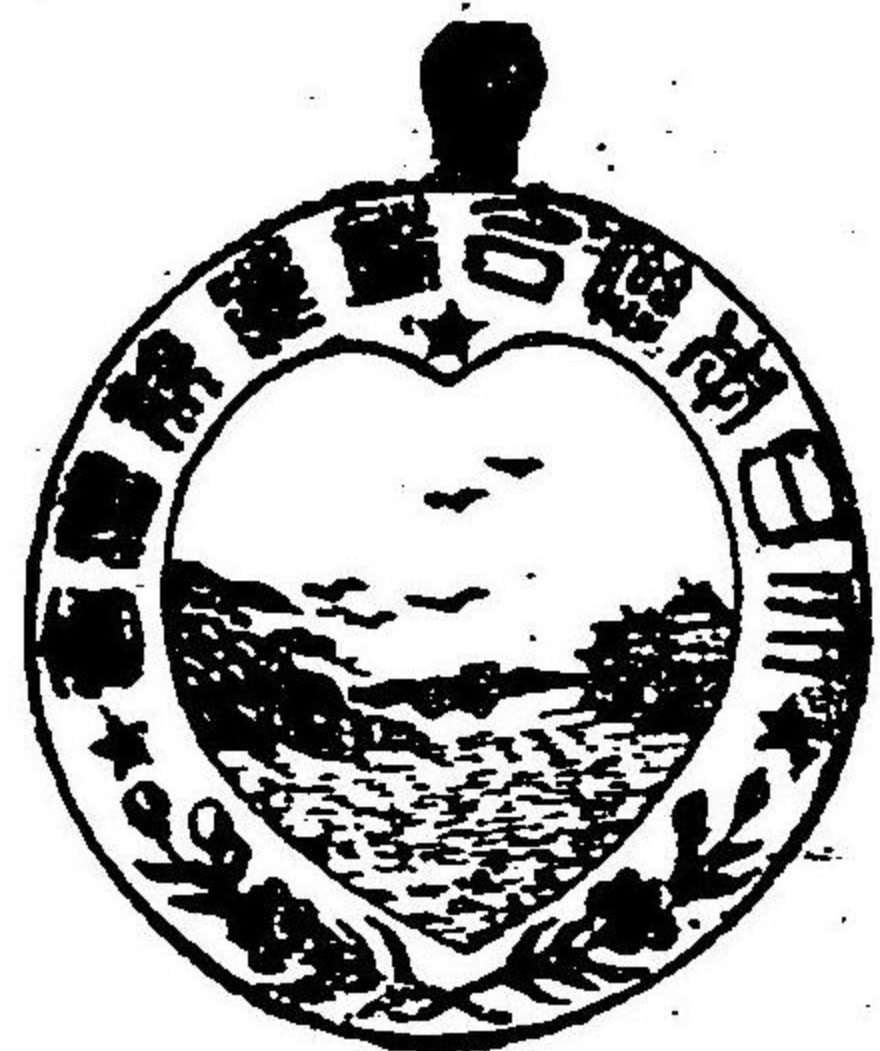
文學博士 桑木嚴翼 關山富共譯

早稲田倫理學綱要

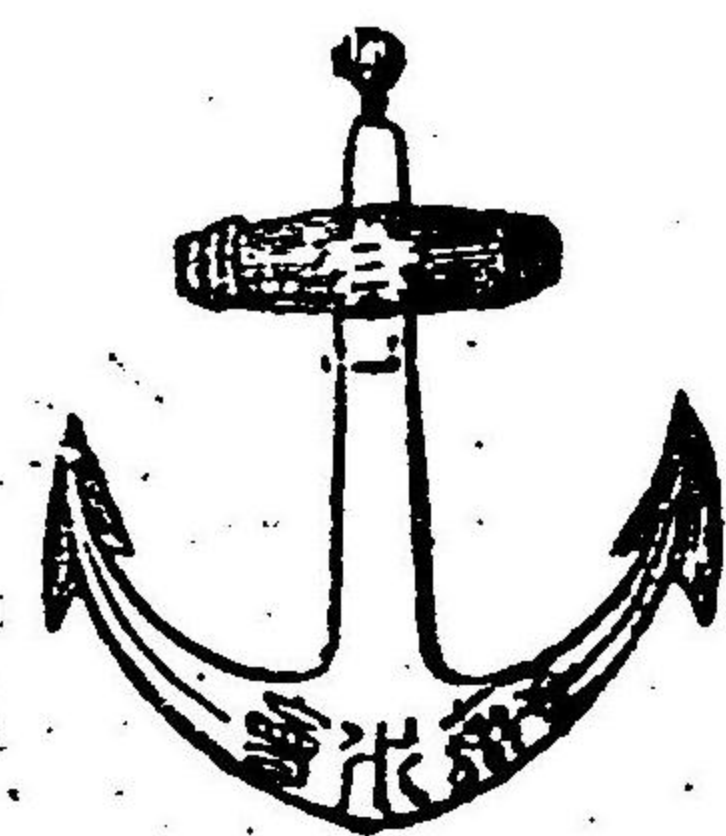
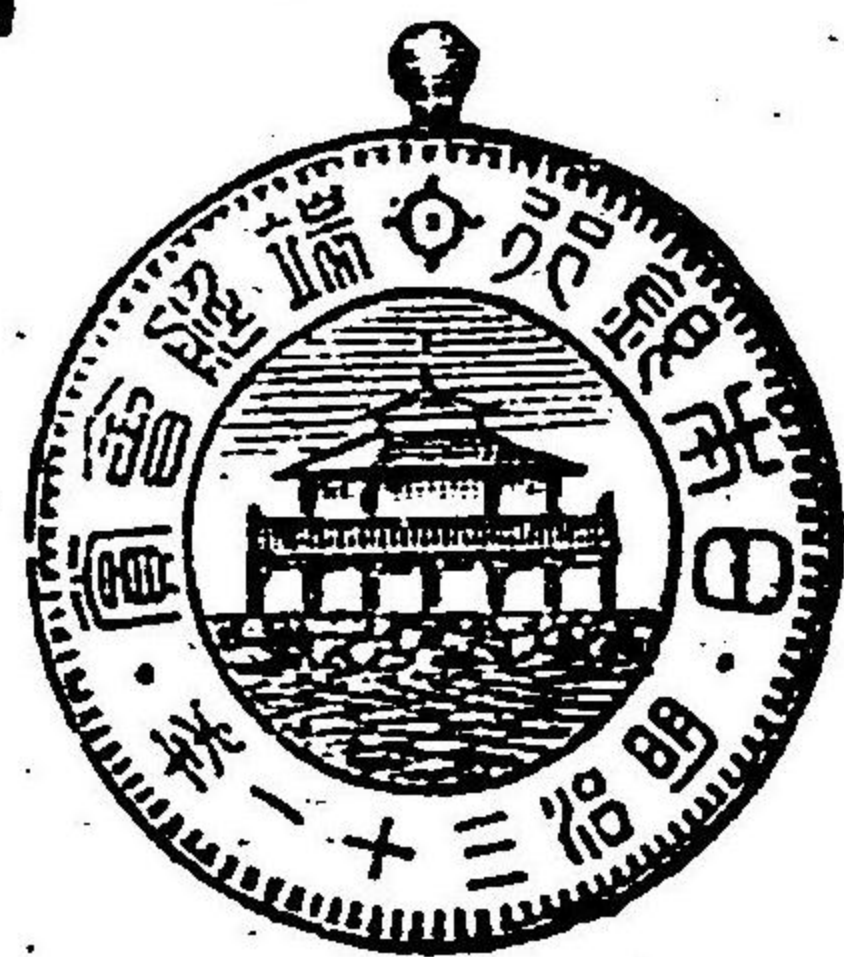
全 壹 冊
紙數二百餘頁
正價金四拾錢
郵税金六錢

本原書は歐米の哲學界でも形式論理の發達の極度に達するものな好評を博せしもの其説を構ふる正確堅固組織亦整然とし一絲の亂る所な殊に其説明の周到明瞭他に其比と見れば是れ譯者の本書と選ぶ所以なり論理學に欲する者の爲に必讀の好著なり

發行所 東京市本區橋本 早稲田大學出版部
發行所 東京市本區橋本 早稲田大學出版部



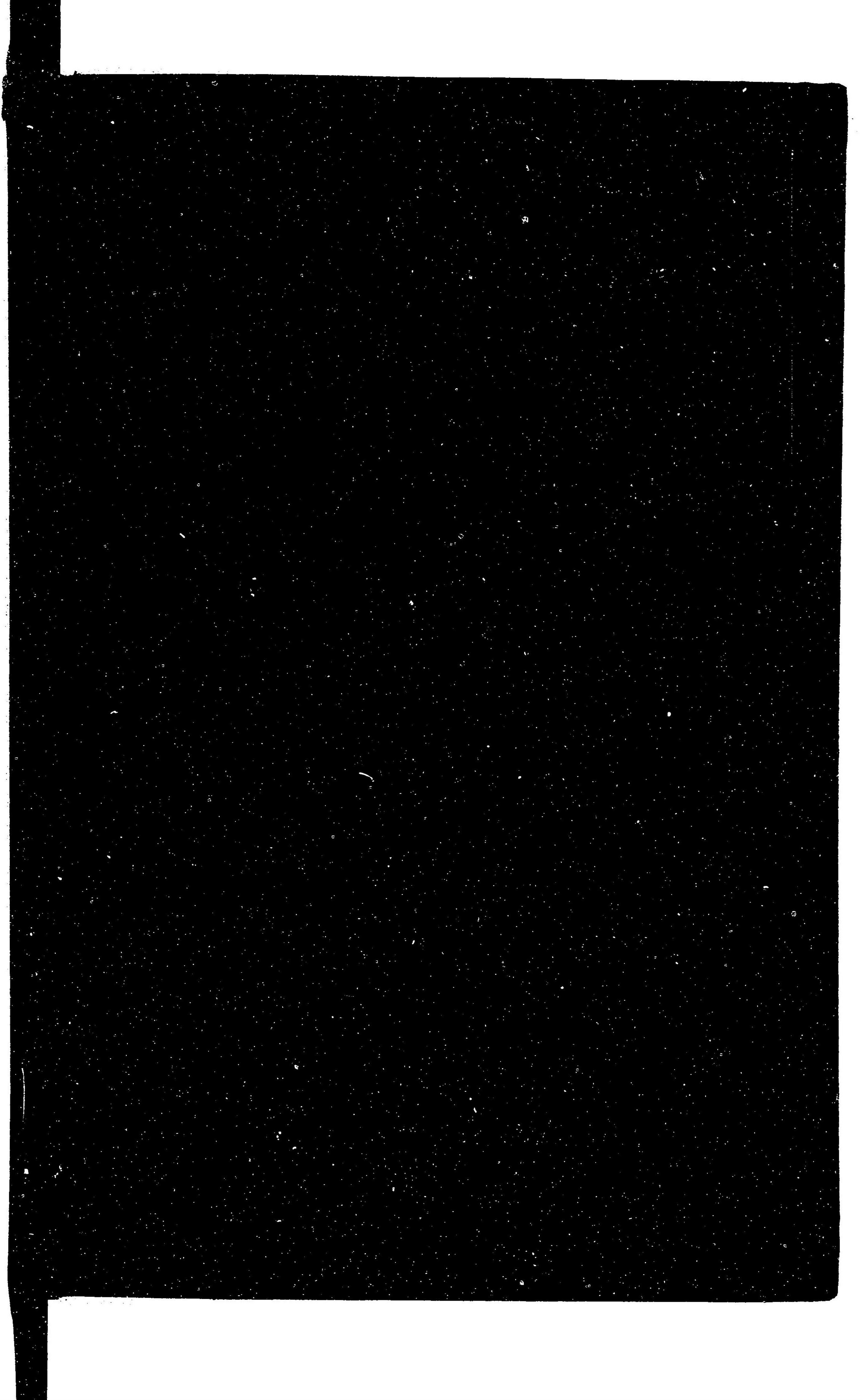
年十治明立創



各學校、團體、俱樂部、共進會等ヨリ賞牌、徽章、帽章、金銀木
 等ノ製作ヲ命セラル、モノ々々幾萬ヲ以テ數フルノ盛運
 ヲ見ルハ、江湖諸彦ガ斯業ハ繁鋪ノ獨專業ニシテ而カモ熟練
 精巧、迅速、廉價、誠實ナルヲ賞セラル深ク御愛ヲ賜ハル
 結果ニ外ナラス弊鋪ハ此信用ヲ維持スルガ爲メニ如何ニ
 術者ヲ督勵シ品質ヲ精撰スルカハ偏ニ御實見ニ依テ御判
 御申越ニ依テ詳細ナル手續書ト鮮明ナル圖書ヲ進呈ス
 町三丁目拾番地

日本帝國徽章商會
 會主 鈴木梅吉 啓具
 (電話番町八五七番)

13
489



203752-004-2

13-489

中等教育 第2期

中等教育会

M36-37

EDM-0359



